

公益社団法人私立大学情報教育協会

平成 26 年度第 1 回情報教育研究委員会情報リテラシー情報倫理分科会 議事記録

I. 日 時：平成 26 年 8 月 1 日(金) 14:00～16:00

II. 場 所：公益社団法人私立大学情報教育協会、事務局会議室

III. 参加者：玉田主査、伊藤委員、田村委員、金子委員、中西委員、本村委員
事務局：井端事務局長、野本

IV. 検討事項

1. 今年度の情報教育研究委員会と分科会の進めかたについて

親委員会では、各分科会の事業の進め方を調整するとともに 27 年度のフォーラム実施に向けて学生との関わりを含めて再構築する。

情報専門分科会では、様々な領域でイノベーションに関与できる産学連携の実践的な学修の仕組み作りとして、大学・産業界・地域・公共団体との連携でパイロット的な学びを企画していきたい。

分野別情報教育分科会では、情報活用教育の事例紹介と情報活用教育を組織的にどのように展開することができるかのモデルを研究する。

高大接続分科会では、教諭の指導能力を支援する仕組みと教員養成課程での情報活用教育の推進を図ることにしており、リテラシーについては下記の取り組みとしている。

(1) 教育・学修方法の実践的取り組みの例示、学修成果の評価方法を研究する。

修正した「情報リテラシー教育のガイドライン」に基づき、教育・学修方法の実践的な取り組みについて参考事例を紹介するとともに、学修成果の達成度評価の基準及び測定方法について研究することとしている。

(2) 情報リテラシー能力を活用できるようにするための教育プログラムを研究する。

学士力の一環として、三つの到達目標である「情報社会の有効性と問題点を認識し、主体的に判断して行動することができる」、「情報通信技術を用いて課題発見、問題解決に取り組むことができる」、「情報通信技術の仕組みを理解し、モデル化とシミュレーションを課題発見、問題解決に活用できる」を在学中に確実に身に付けられるようにするため、4年間又は6年間のさまざまな学修段階を通じて訓練できるよう取り組みのモデルを研究することとしている。

- ・ 教育・学修方法の実践的な取り組みや到達度評価の基準及び測定方法について研究することと、現状は初年次教育で終わっていることから卒業まで学修できる教育プログラムが発信できないかを 29 年度目標に提案したい。

2. 研究の進め方について委員の意見

- ・ 個別のリテラシ授業を想定しがちだが各分野の教員との連携、フィードバックを必要としている。学年進行での対応を考えている。例えば 1 年ではレポートが書けるようになるなどの例示ができないか。
- ・ 作成したガイドラインの普及も必要ではないか。
- ・ メディアリテラシは初等教育で社説の読み比べなどある。授業ではどのように情報を取り

入れ、整理、加工、発信・発表するか実施している。リテラシ名称がついて科目でも教員によって内容が異なる場合がある。

- ・ ルーブリックのようなもので、大学、学部、目標に応じて組み合わせ利用できるようなものが良いのではないか。
- ・ ガイドラインを具体化し、松竹梅が選べるようにしてはどうか。
- ・ 授業例として例えば、情報の「真実」「偽り」、発信者の意図、情報源の確認、ページを比較させるなど。
- ・ 到達度それぞれについて、松竹梅を作成し、ルーブリック化させてはどうか。
- ・ 具体的な授業や課題、基準などを出し、学部学科のカリキュラムでどの目標・到達度にあてはまるのか想定させてはどうか。
- ・ 授業例にあわせて仮に作成できないか、例えば、予習復習を含めたことや反転授業など考えられないか。

以上の検討を踏まえ、「授業のねらい」「授業内容」「授業の展開」「課題学習」の項目をいれた授業例についてを到達目標ごとに分担して案を持ち寄り検討することにした。

V. 今後の予定について

- ・ 授業例を分担した到達目標にあわせて作成し、11月11日ごろまでにメールリストに発信して検討することになっている。また次回の分科会は11月20日（木）17時を予定している。